地域研究年報　**42**　2020　77–92

鹿行南部におけるスポーツ合宿の特性と地域間連携の可能性

吉沢　直・綾田泰之・山口桃香・武　越・李詩慧
浅見岳志・封　雪寒・張　羚希

本研究ではスポーツ合宿地が近接する鹿行南部の波崎エリア，神栖エリア，鹿島エリアにおけるスポーツ合宿の特性を分析し，スポーツ合宿地における地域間連携の諸相について検討した．波崎エリアでは，1990年ごろからエージェントとの協力関係のもとでスポーツ合宿に取り組み，民間宿泊施設によるスポーツ施設の設置が進んだ．神栖エリアでは，公共スポーツ施設を用いスポーツ合宿が実施され，工員向けに設置された宿泊施設の閑散期を埋める役割を果たしている．鹿島エリアでは，鹿島アントラーズを利用したサッカー大会やDMOによるインバウンド合宿が行われる．３つのエリアでは，それぞれ地域の特性を生かした各エリア特有のスポーツ合宿が行われ，地域間連携の重要性は高くない．これにはスポーツ合宿におけるツーリストの行動範囲が宿泊施設とスポーツ施設に留まり，地域間連携の必要性が乏しいことが影響していると考えられる．
キーワード：スポーツツーリズム，スポーツ合宿地，地域間連携，鹿行南部，

Ⅰ　はじめに

Ⅰ－１　研究の背景

人々の関心はモノ消費からコト消費へと移行し，交通インフラ発展や余暇時間増大に伴い，ツーリズムが全世界規模で拡大している．その中で，日本では2020年の東京オリンピック開催を控え，スポーツを「する・見る・支える」ことを目的としたスポーツツーリズムへの関心が高まっている．スポーツツーリズムは「スポーツ参加型」，「スポーツ観戦型」，「都市アトラクション訪問型」の３つに分類され（原田，2003），そのうちスポーツ参加型の中で日本特有のものとして，スポーツチームがスポーツ活動に適した環境を求め各地を訪問するスポーツ合宿がある．

日本では，1950年代後半以降に多くの農・漁村の副業として民宿業が登場し（石井，1970），その民宿において学生団体等のスポーツ合宿の受け入れが始まった．その後，グラウンド，体育館，テニスコートの設置が進み，その結果，首都圏近縁地域にスポーツ合宿の受け入れに特化した地域が出現した．例えば，長野県菅平高原は，夏季にラグビーおよび陸上競技のスポーツ合宿を受け入れ，スポーツ合宿の発展に伴い土地利用の変化が生じた（新藤ほか，2003）．また，千葉県白子町では，テニスを中心にスポーツ合宿を受け入れ，民宿がスポーツ合宿への取り組みを契機に「大規模複合型」，「スポーツ複合型」，「テニス型」，「既存民宿型」に分化した（井口ほか，2006）．これら両地域に共通する点は，農業的な土地利用からスポーツ施設への転用が生じたことである．さらに奄美大島では，自然・社会的な地域条件を生かして長距離の陸上競技のスポーツ合宿を受け入れ，行政を中心に受け入れ体制の組織化がなされた（須山，2010）．このようにスポーツ合宿の受け入れに伴い地域構造は変化し，地理学はその変容を明らかにしてきた．しかし，前掲した先行研究は民宿集積地区を対象としたミクロケールの分析に留まる．そこで本研究では，複数市町村にまたがりスポーツ合宿に取り組む地域のスポーツ合

宿の特性について分析する．

現在，観光地域間または観光アトラクション間の連携への関心が高まっている．観光振興における地域間連携は，制度に基づかない自発的な取り組みとして実施されてきた（片山・牧島，2016）．しかし，2008年に政府は観光圏に関わる法律を制定し，固有の観光資源を有する複数観光地間の協同した戦略的な観光振興を奨励している[1)]．なお，その背景には観光地での滞在時間を伸ばす狙いがある．また現在，観光振興政策の１つとして日本版DMO（Destination Management Organization）[2)]が注目される．日本版DMOは従来から存在した観光経営スケールである「地域DMO」に加え，「地域連携DMO」「広域連携DMO」の２つの区分を有し，地域間連携が促進される[3)]．そこで，本研究ではこうした地域間連携がスポーツ合宿地においては，どう機能するのかについて検証を試みる．

以上の研究背景を踏まえ，本研究ではスポーツ合宿に取り組むエリアが近接する地域におけるスポーツ合宿の特性を分析した上で，スポーツ合宿地の地域間連携における諸相について検討することを目的とする．

Ⅰ－２　研究方法

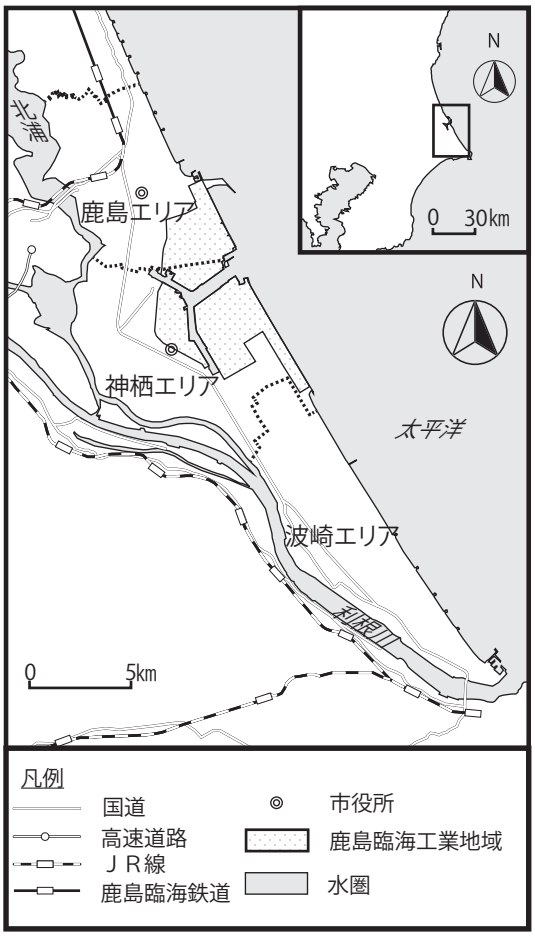
本稿にて研究対象地域として選定したのは，茨城県の南東部に位置する「鹿行南部」である．本稿では，スポーツ合宿地としての領域を考慮し，旧波崎町，旧神栖町，旧鹿島町の旧３市町村を分析対象とした．以降，それぞれを波崎エリア，神栖エリア，鹿島エリアと呼称し，これら３地域の総称を鹿行南部とする．鹿行南部を含む鹿嶋市，潮来市，神栖市，行方市，鉾田市はプロサッカーチームの鹿島アントラーズのホームタウンに指定されており，スポーツを通じたまちづくりに取り組んでいる．また，2019年９月現在，日本版地域連携DMOの候補法人である「アントラーズホームタウンDMO」を有し，その主要な取り組みとしてスポーツ合宿の推進が行なわれ，それらは特に波崎エリア，神栖エリア，鹿島エリアを中心に展開される．

本研究では，鹿行南部の波崎エリア，神栖エリア，鹿島エリアの３つのスポーツ合宿の特性を整理し，その上でスポーツ合宿地間の地域間連携の実態や課題について検証する．まずⅡにて，研究対象地域を概説する．つづいてⅢにて，３地域でそれぞれ実施されるスポーツ合宿の特徴について整理する．データ収集としては，スポーツ合宿に取り組む宿泊施設計17軒，各行政や旅館組合などスポーツ合宿関連組織への聞き取りを行った．その後Ⅳにて，３エリアのスポーツ合宿の差異を各地域の宿泊施設とスポーツ施設の比較をもとに整理する．その上でⅤにて，３エリアのスポーツ合宿の特性についてまとめ，スポーツ合宿の受け入れにおける地域間連携について考察したい．

Ⅱ　研究対象地域の概要

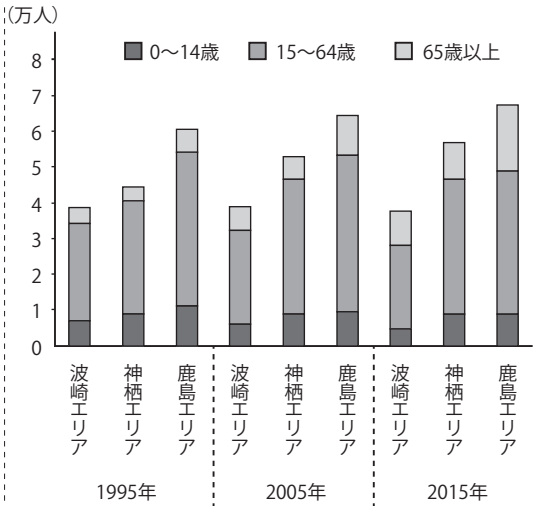
鹿行南部は利根川と太平洋に挟まれ，東関東自動車道やＪＲ総武線により東京都心部と結ばれる（図１）．夏季は涼しく，冬季は温暖な気候でスポーツ活動に適した気候である．また，土壌は利根川により運搬された水はけのよい土地であり，グラウンド設置に適する．研究対象地域である鹿島エリアは鹿嶋市の一部であり，波崎エリアと神栖エリアは神栖市を構成する[4)]．国勢調査によると，1995年以降に波崎エリアの人口はやや減少傾向にあるが，神栖エリアおよび鹿島エリアでは人口は増加している（図２）．高度経済成長期には，鹿行南部沿岸部に大規模工業地帯を設置する「鹿島開発」が実施され，鹿行南部に日本国内の鉄鋼，石油化学，金属などの工業が多く集積した．その結果，工場関係者が居住するためのニュータウンが造成され，鹿行南部の人口が増加した．しかし，近年は３地域ともに高齢化が進行している．

以下，３つのエリアの地域概要について「波崎町誌（波崎町誌刊行専門委員，1990）」「神栖町誌（神栖町史編さん委員会編，1989）」「図説鹿嶋の歴史近代･現代編（鹿嶋市文化スポーツ振興事業団編，2011）」を参考に整理する．



第１図　研究対象地域（2019）

波崎エリアは最も南部に位置し（図１），鹿行南部の中でも比較的農業が盛んであり，水はけのよい土地条件を生かしたピーマン栽培が盛んな地域である．一方，稲作においては条件不利地域であり，漏水を防ぐために土地を掘り下げた「掘下げ田」，ビニールを敷いた「ビニール水田」などの工夫がされてきた．また，鹿島開発の際には，農業から工業用地への転用が盛んに行なわれ，耕地面積が減少した．近年は，多くの農家が少子高齢化の影響を受け，耕作放棄地の増加や，後継ぎ不在などの問題に直面している．一方，漁業では太平洋での沖合沿岸漁業と利根川での内水漁業の両方が盛んであり，特に南東部では水産加工業の発展が見られた．また，かつては潮干狩りやサーフィンいった海岸観光も盛んで，水産加工業者が副業として民宿を初めとした観光業を行っていた．しかし，1985年ごろをピークに海水浴客数に減少の傾向が見え始め，それらをターゲットとした民宿経営も不振に陥った．その後，1990年ごろからスポーツ合宿が積極的に取り組んでいる．



第２図　鹿行南部の人口構成の推移

（国勢調査より作成）

神栖エリアは波崎エリアと鹿島エリアの間に位置する（図１）．鹿島開発により臨海工業地帯が形成された際，神栖エリアは企業数，面積ともに最大の拠点地域となった．労働者の多くが神栖エリアに移住し，その人口は鹿島開発以前の1950年から2015年の間に１万人以上増加した．加えて，鹿島開発は神栖エリアの財政規模拡大に大きく寄与した．鹿島開発以前（1955年度）の一般会計歳出予算が3869万円であったのに対し，開発後（1983年度）には104億3226万円に達した[5]．また，2016年における神栖市の自主財源額は330億円を超えており，県内でも水戸市，つくば市，日立市に次いで４番目に大きな自主財源を有する[5]．その財政規模の拡大に伴い生活環境の整備が進められ，道路や県立高校などの公共施設，スポーツ施設などの福祉施設の整備が進んだ．また，鹿島臨海工業地帯では毎年５月から６月ごろにかけて，定期修理と呼ばれる工場設備の整備が行われ，そ

の際に整備を専門とする全国の工員が神栖エリアに滞在する[6]．定期修理に携わる作業員のほとんどが神栖エリアに１ヶ月程度滞在するため，毎年一定の宿泊需要が発生する．そのため神栖エリア内には工員を主要な顧客とする宿泊施設が立地し，例年定期修理の際には，神栖エリアの多くの宿泊施設が満室となる．

鹿島エリアは神栖エリアの北西に位置する（図１）．古くから多くの参拝者が訪れる鹿島神宮周辺には商店街が形成され，そこが地域経済の中心である．また，鹿島臨海工業地帯の一部は鹿島エリアに属し，住友金属工業鹿島製鉄所に代表される企業群が立地する．工業地帯が形成される際，工場関係者をはじめとした多くの移住者が流入した．その中には企業のサッカークラブで活動する者もおり，サッカーが土着住民と新住民がつなぐ役割を果たしたという見解もある．（柳沢，2007）．鹿島開発以降，製造業と建設業が発展したが，1990年代初頭に工業の衰退が始まり，「サッカーによるまちづくり」が推進されるようになった．1993年にはJリーグの発足に伴い「鹿島アントラーズ」が創設され，同年の1993年のファーストステージで優勝を契機に，多くの観戦者を集客した．観光客数は1993年に200万人を超え，2001年以降はカシマスタジアムの最大収容人数が約1.5万人から約４万人に増加したことも影響し，観光客数は増加傾向にある．周辺の交通整備も進み，1994年には「鹿島サッカースタジアム駅」が開業した．市町村合併により鹿嶋市が誕生した1995年，鹿嶋市は「サッカーのまち・スポーツのまち鹿嶋」と呼称し，スポーツによるまちづくりを掲げている[7)8)]．

Ⅲ　各エリアのスポーツ合宿の特徴

Ⅲ－１　波崎エリア

１）宿泊施設の取り組み

波崎エリアでは，旅館業協同組合に所属する19軒の宿泊施設のすべてがスポーツ合宿に取り組み，そのうち18軒が民間スポーツ施設を所有する（表１）．以下，各宿泊施設への聞き取りから波崎エリアの宿泊施設の取り組みを把握する．

波Aは2019年現在，171部屋を有し1000人の収容が可能な波崎エリア最大の施設である．スポーツ施設も豊富で，サッカーグラウンド９面（人工芝７面，天然芝２面），フットサル10面および野球場１面を有する．波Aは法人経営であり，主な労働力の社員20人に加えて繁忙期にはパートを50人程度雇用している．波Aは14年前まで水産加工工場であり，現在とは経営者も異なっていた．前経営者の時期には水産加工場とスポーツ合宿の両方に取り組んでいたが，経営者の変更を契機に顕著にスポーツ合宿事業を拡大し現在の姿に至る．グラウンド以外には，過去の水産加工場の冷蔵場を改築したダンスホールを有し，前業種からのス

第１表　波崎エリアにおける宿泊施設とそのスポーツ施設の所有

No.	宿泊施設		所有スポーツ施設（面数）		
	収容人数	部屋数	サッカーコート		その他
			人工芝	天然芝	
波A	1000	107	6	3	野球場 1 フットサルコート 10 ダンスホール 12
波B	750	95	3	12	フットサルコート 3
波C	320	70	1	7	0
波D	300	42	0	10	0
波E	200	29	0	5	0
波F	200	31	0	2	野球場 2 バスケットボール等 1
波G	200	39	0	3	0
波H	180	42	0	3	野球場 2 フットサルコート 2
波I	180	23	0	3	バッティング練習場 1
波J	150	25	0	3	0
波K	110	24	0	2	0
波L	100	22	0	2	0
波M	100	16	0	2	フットサルコート 1
波N	90	14	0	1	0
波O	80	15	0	2	0
波P	80	13	0	2	0
波Q	80	17	0	2	0
波R	60	12	0	0	0
波S	60	9	0	1	0

（波崎旅館共同組合提供資料より作成）

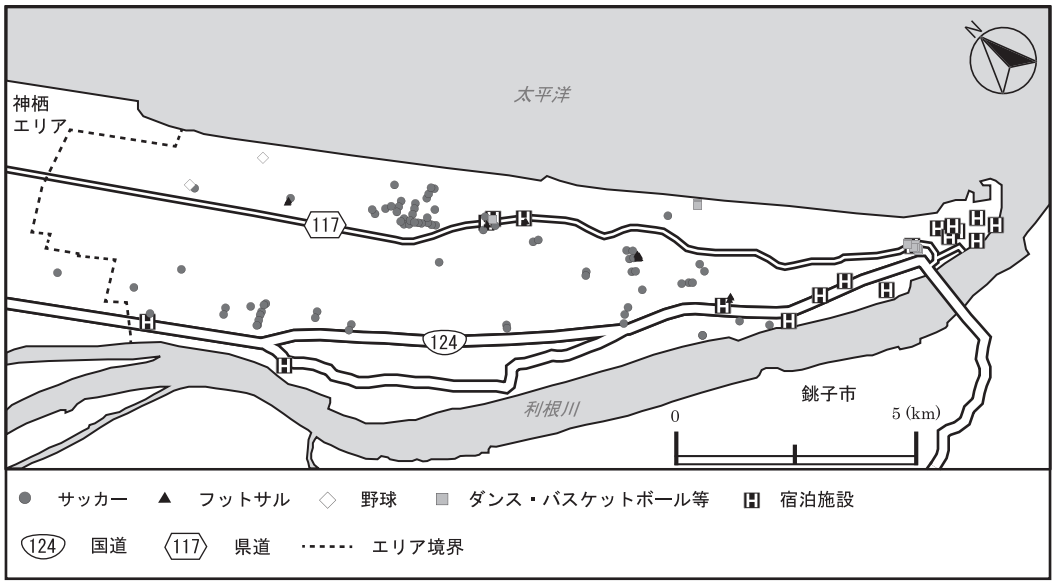
ポーツ施設への転用が確認される．現在ではスポーツ合宿以外の集客はほとんどなく，学校の長期休暇期間に宿泊客が集中する．全体の客数の半数を大学生が占め，週末の利用が多いという．また学生に加えて，新人研修に参加する社会人も受け入れる．宿泊客の８割がリピーターであり，特にダンス合宿は競合する宿泊施設もなくリピート率が非常に高いという．エージェントを通して予約する利用客と個人で直接予約する利用客の割合は９：１であり，エージェントからの送客が重要になっている．

波Cの収容人数は350人であり，サッカーグラウンド８面（人工芝１面，天然芝７面）を所有する．1967年に開業し，当時は夏季に訪れる釣り人向けの小規模民宿であった．その後1990年ごろからスポーツ合宿に参入し，1996年から土地を所有し宿泊施設棟を増やした．宿泊規模の拡大に伴い，親戚や他宿泊施設からの紹介を受けてグラウンド管理をはじめ，経営規模の拡大に伴い2000年には個人経営から法人経営へと転換した．現在，ほぼ全ての宿泊がスポーツ合宿客によるものであり，そのうち９割がグラウンドを利用する．さらに，スポーツ合宿客の９割は個別合宿であり，その７割はエージェントにより送客される．残りの３割は直接予約であるがリピーターであり，合宿終了時に次年度の予約をするという．年間の宿泊客の７割を占める夏季の間は，大学生の予約をなるべく避け，小中学生や高校生をメインターゲットとする．グラウンド管理は，経営者を中心に企業内部の労働力にて行い，３日に１回ほどの頻度で手入れをすれば，１面当たり１時間程度で芝を刈り終えるという．しかし現状，グラウンド貸出収入では，グラウンド管理費のうち半分程度しか賄うことができず，宿泊収入により補填しているという．これは波崎エリアの宿泊施設におけるグラウンド管理において共通して見られる方針であった．

波Iは，1983年に和風の割烹旅館として開業し収容人数180人である．現在，宿泊施設Cはサッカーグラウンド３面，野球場３面，フットサル２面を所有する．グラウンドの貸出と１泊３食の食事の提供，また送迎バス２台を有し，各グラウンドまで送迎を行う．波Iでは，1993年頃よりサッカー大会開催を契機に，エージェントと協力関係の中でサッカー合宿に取り組む．また，それまで収入規模の大部分を占めた地域住民による冠婚葬祭等の宴会需要の低下もスポーツ合宿に取り組む要因となったという．当初は宿泊施設の近くに１面のグラウンドを所有するのみであったが，スポーツ合宿の需要増加を受け徐々にグラウンドを増設した．５年前より１面の野球場を所有し，２年前にはサッカーグラウンド２面を野球場としても利用できるよう改変した．客層のメインは関東からの合宿客で，夏休みの時期は小学生が中心である．６月から７月にかけては週末に野球大会が開催され，この時期には利用者のほとんどが大学生となる．野球場を３面有する波Iでは，サッカー合宿に加えて野球の合宿客も重要な固定客であり，全客数の25％を占める．今後はサッカーだけではなく，スポーツの町としての神栖市全体の発展を期待する．

以上のように，波崎エリアのスポーツ合宿は各宿泊施設が所有するスポーツ施設を中核として成り立っている．そこで波崎エリア全体での民間所有スポーツ施設の分布と新設時期の分析を行う．

まず，現在の宿泊施設及びスポーツ施設の分布を示したものが図３である．宿泊施設は南部に立地し，スポーツ施設は波崎エリアの北部および中部に立地する．南部に宿泊施設が集積する要因としては，多くの宿泊施設が1960年代後半に海水浴客を主要な顧客として民宿を開業し，海岸観光の衰退とともにスポーツ合宿事業に移行したことがあげられる．しかし，南部はもともと居住や漁業のための土地利用がすでに行われており，スポーツ施設を新設するのは困難であった．その一方で，現在グラウンドの多く立地する北部および中部エリアはもともと農地であり区画の規模もグラウンド設置に適していた．加えて，農家の高齢化および後継ぎ不足により，農家側としても農地の転用に肯定的な農家が多かった．その結果，波崎エリアの宿泊施設の多くは10km前後離れた位置にス



第３図　波崎エリアにおけるスポーツ合宿関連施設の分布（2019）

（住宅地図および現地調査より作成）

ポーツ施設を有する状況になっている．現在，多くの宿泊施設がバスを所有し，送迎も宿泊施設が行っている．

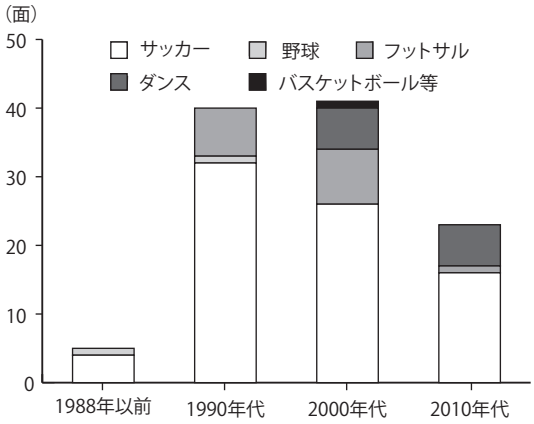
次にスポーツ施設の新設時期について現地調査および「ゼンリン住宅地図神栖市２（波崎）」の2017年版から得られたスポーツ施設の位置を基に，同1988年，1999年および2009年版と比較することによって整理する．

Ⅲ章のスポーツ分類に基づいて年代ごとの新設面数を表したものが図４である．スポーツ施設は2000年代頃までに特に増加したことが読み取れる．以降，宿泊施設の受け入れ可能人数と必要スポーツ施設の均衡がとれた結果，現在はスポーツ施設の拡大も収束傾向にある．また，近年は，サッカー以外のスポーツ施設の割合が増加し，スポーツ種目が多様化している．

２）スポーツ合宿関連組織の取り組み

波崎エリアのスポーツ合宿において，宿泊施設所有のスポーツ施設がハード面での特徴である．その一方で，ソフト面での特徴はスポーツ大会を開催し，スポーツチームを宿泊施設に送客するエージェントの存在であろう．

宿泊施設への聞き取りによると，エージェントのうち，波崎エリアに大きな影響を及ぼしたエージェントが２社あるという共通の見解が得られた．東京都に位置する２社は，もともとは同じ会社であり，波崎エリアで最初のサッカー大会を企画した会社である．その後，エリア内での大会数を増やし，現在最大のものは12月末に全国から



第４図　波崎エリアにおける民間スポーツ施設の新設数推移

（住宅地図および現地調査より作成）

120チーム以上を集め５日間に渡る．また，この大会は各都道府県のインターハイ予選や選手権予選の結果などによってカテゴリー分けされ，特に一番上のカテゴリーでは全国屈指の強豪校が試合をする．こうしたエージェント運営のハイレベルな大会が波崎エリアのイメージ構築にも貢献していると考えられる．

エージェントの役割は大会だけではなく，波崎エリアのスポーツ施設の整備においても重要であった．波崎旅館業協同組合によると，1990年以降に波崎エリアが合宿地化するにあたって旧波崎町に計画を提案し，各宿泊施設にグラウンド設置の進言をしたという．このように，送客だけでなくスポーツ合宿環境の整備においてもエージェントはアイデアをもたらした存在として評価できる．

もう一つの重要な組織として波崎旅館業協同組合がある．これは波崎エリアの宿泊施設からなる組織であり，定期的に総会を行い波崎エリアのスポーツ合宿に関する議論がなされる．つまり，この組織が波崎エリアのスポーツ合宿地としての調整・経営機能を有する．また，波崎旅館業組合の特徴として，組合が直接所有するグラウンドを有する点がある．これらは，必要に応じて各宿泊施設所有のグラウンドに加えて利用でき，各宿泊施設は組合所有グラウンドも利用し，多様なスポーツ合宿をチームに提案できる．また，波崎旅館業組合では利用者の利便性の向上のための取り組みも行う．例えば，「波崎旅館・スポーツガイドMAP」を作成し，宿泊施設やグラウンドの詳細な立地に加え，病院や飲食店などの情報を提供する．2019年版のMAPは15,000部発行されており，協力を得られた付近の飲食店やコンビニエンスストアに置かれている．

Ⅲ－２　神栖エリア

１）宿泊施設の取り組み

神栖エリアには全部で34軒の宿泊施設があり，そのうち24軒の宿泊施設がスポーツ合宿に取り組む[9]．また，波崎エリアとは異なり24軒のうちスポーツ施設を所有するものは存在しない．以下，各宿泊施設の聞き取りから神栖エリアの宿泊施設の取り組みを把握する．

神Fは1972年に営業を開始した宿泊施設である．営業開始当時は定期修理で神栖エリアを訪れる工員を中心に宿泊サービスを展開していた．スポーツ合宿の受け入れを開始したのは1995年ごろだという．受け入れの要因は，当時波崎エリアで盛んになり始めたスポーツ合宿の受け入れをエージェントから提案されたことであった．また，定期修理以外の閑散期の宿泊客を獲得するという意味でも好都合であったという．スポーツ合宿の受け入れを開始した当初，神Fを含む神栖エリアの10軒ほどの旅館の間でサッカーグラウンド１面を共同所有しはじめた．しかし，グラウンド整備が困難であり，約15年前に共同所有から抜けたという．これは５月中旬から６月中旬にかけて工員が多く訪れ，夏季のスポーツ合宿のハイシーズンに向けたグラウンド整備に手が回らないためだという．そのため，現在神栖エリアの宿泊施設では，スポーツ施設を所有するものはなく，市内の公共スポーツ施設を利用しスポーツ合宿を提供する．年間を通した工場関係者とスポーツ合宿客の売り上げはほぼ５：５であり，５月，６月は工場関係者，７月，８月は合宿客が多いという．スポーツ合宿の多くはリピート客，あるいはエージェントによって紹介される宿泊客である．

神Hも1973年から営業し，工員を受け入れる旅館である．スポーツ合宿客の受け入れを開始したのは1995年ごろだという．定期修理の宿泊客が減少する夏季の収入を確保するためにスポーツ合宿を受け入れ始めた．また，当時はＪリーグ発足によりサッカーブームだったこともあり，スポーツ合宿の受け入れを開始した．グラウンド所有はせず，公共スポーツ施設を利用したスポーツ合宿を提供する．しかし，その売り上げの内訳は工事関係者が８割で，スポーツ合宿は２割に留まる．また，スポーツ合宿の多くは毎年神Hに滞在する野球客だという．スポーツ大会などで神栖エリアを訪れる宿泊客については，行政のスポーツツーリ

ズム推進室や神栖市旅館業組合を通して受け入れる．しかし，あくまでスポーツ合宿による収入は定期修理がない時期の収入を補填するためであり，定期修理で神栖エリアを訪れる工員を今後も主要な顧客とする方針を持つ．また，経営者が高齢化しており今後の継続意欲は高くない．そのためスポーツ客のための設備の改修や増築を行うつもりもないという．

神Oも，F同様に鹿島開発に伴い，工員向けの宿泊施設として営業開始した．スポーツ合宿の受け入れを開始したのは2000年ごろであり，サッカー大会の参加チームの送客を受けたのがきっかけであった．それ以降，工員とスポーツ合宿客を顧客として，売上の比率は同程度であるという．なお，スポーツ合宿客の９割ほどがサッカー大会に参加する学生だという．スポーツ合宿客は，エージェントに仲介されて配宿されることが多い．また，神Oでは波崎エリアでのサッカー大会時にも送客を受けるという．大会時のエージェントの配宿の受け入れがほとんどのため，リピーターの獲得が困難だという側面もある．また，神Oもスポーツ施設の所有の意思はない．現在の状況に対し，スポーツ大会数を増やすことで工場関係者以外の宿泊を確保し，より安定した旅館経営を行っていきたいと考えている．そのため，エージェントや神栖市によるスポーツ大会の開催に伴う宿への送客への期待が大きい．

２）スポーツ合宿関連組織の取り組み

神栖エリアには，表２に示したとおり豊富な公共スポーツ施設が設置される（写真１）．その背景には，鹿島臨海工業地域を有し，豊富な公共財源をもとに福祉施設への投資が行われることが指摘できる．スポーツ施設の運営・管理は，神栖市文化・スポーツ文化振興公社によって行われる．そのため，各宿泊施設はスポーツ施設の整備を自身で行う必要がない．

これらの公共スポーツ施設をスポーツ合宿に利用する場合は，現在，行政内の組織である「スポーツツーリズム推進室」を通してスポーツ施設の予約を行っている事が多い．スポーツツーリズム推進室は，2017年に神栖市役所の観光商工課に設置された組織であり，市内でのスポーツ合宿やスポーツイベント促進のために設置された．こうした行政と民間の協力関係の中でスポーツ合宿が推進されることが神栖エリアの特徴である．スポーツツーリズム推進室への聞き取りによると，神栖市に設置された組織であるために，本来ならば神栖エリアと波崎エリアの両方に対応した組織とし

第２表　神栖エリアにおける公共スポーツ施設

施設名	種別	面数
石塚運動公園	サッカー	2
	ソフトボール	4
神栖市海浜公園	サッカー等	3
	野球・ソフトボール	2
	テニス	24
	プール	1
高浜運動広場	サッカー	1
	野球	1
神栖総合公園	サッカー	2
	フットサル	3
神之池緑地公園	野球	1
	テニス	6
	陸上競技場	6
神之池パターゴルフ場	ゴルフ	2コース
神栖市市民体育館	バスケットボール等	2
神栖市武道館	柔道	2
	弓道	6人立
	剣道等	3

（現地調査により作成）

写真１　公共スポーツ施設の様子

（2018年10月　武撮影）

て位置づくはずであるが，現状としては，神栖エリアとの協力関係が波崎エリアに比べ強いという．その理由としては，波崎エリアには波崎旅館業協同組合とエージェントの協力関係が1990年頃より確立され，かつスポーツ合宿に参加するチームのほとんどがリピーターであるために，新たな協力関係を構築する必要性に乏しいという．このように神栖市内にある波崎エリア，神栖エリアでは異なるスポーツ合宿が展開され，スポーツ合宿に関係する組織も異なっている．

神栖市におけるスポーツ合宿は，スポーツ大会時の受け入れが中心となっている．その際の配宿は神栖市旅館業組合によって行われる．神栖市旅館組合の提供資料によると，2017年時には神栖エリア内でスポーツ大会が計11大会実施され計5449泊の宿泊需要が大会期間中に発生した．加えて，多くの大会が小中学生の大会であるために，選手の保護者の宿泊需要も発生しており，彼らは選手とは別の宿泊施設することが多いという．

Ⅳ－３　鹿島エリア

１）宿泊施設の取り組み

鹿島エリアの宿泊施設は15軒であり，そのうちの５軒のみがスポーツ合宿を受け入れる（表３）．以下，各宿泊施設の聞き取りから鹿島エリアの宿泊施設の取り組みを把握する．

鹿Aは，鹿島エリアにおいて最大規模を誇る宿泊施設である．旧国有の保養施設であったが小泉

第３表　鹿島エリアにおける宿泊施設とそのスポーツ施設の所有

No.	宿泊施設			所有スポーツ施設（面数）		
	収容人数	部屋数	スポーツ合宿の実施	サッカーコート 人工芝	サッカーコート 天然芝	その他
鹿A	495	59	有	0	5	フットサル4・野球1・テニス25・・体育館1棟（バスケ1・卓球8・バドミントン2・バレーボール1・剣道2）グラウンドゴルフ24・パークゴルフ2・ゴルフ打席120
鹿B	250	186	無	0	0	0
鹿C	99	55	有	0	0	0
鹿D	80	20	有	0	0	0
鹿E	71	15	有	0	3	0
鹿F	70	42	有	0	1	0
鹿G	70	21	無	0	0	0
鹿H	60	19	無	0	0	0
鹿I	54	48	無	0	0	0
鹿J	45	45	無	0	0	0
鹿K	40	17	無	0	0	0
鹿L	40	17	無	0	0	0
鹿M	37	7	無	0	0	0
鹿O	25	8	無	0	0	0
鹿P	25	10	無	0	0	0

（鹿嶋旅館業組合ホームページおよび各旅館ホームページより作成）

政権による保養所等の民営化により，2003年頃から民間所有となった．施設内には，サッカー場５面，フットサル４面，野球１面，テニスコート25面，体育館１棟（バスケ１面・卓球８台・バドミントン２面･バレーボール１面･剣道２面)を有し，鹿行南部でも最大規模である（写真２）．この拡大の背景には大手企業との協力関係があり，その潤沢な資金をもとに開発が行われた．また，サッカー協会との協力関係もあり，JFAの指導者研修会の会場としても利用される．しかし，この施設は鹿島エリアの組合等には所属せず，スポーツ合宿を独自に推進してきた側面もある．

鹿Eは2003年頃に営業を開始し，2006年頃から顧客獲得のためにスポーツ合宿を開始した．2018年には，１年間に120団体ほどを受け入れ，１団体は平均50人程度であるという．鹿Eではスポーツ合宿の需要の増加に応じ，2006年にグラウンド２面，2012年にグラウンド１面を開発し，同年にはシャワー付きの新館も改築するなど顕著な事業拡大が認められる．また，鹿島Eは2011年頃から独自に小学生のサッカー大会を実施し，2018年には年間に３大会を主催している．その結果，その大会に参加したチームが大会以外の時期にも個人合宿のための利用に繋がっている．

鹿Fは，記録の残る限り江戸時代から鹿島神宮前の参道で参拝に宿泊業を実施したが，交通網の発達により参拝客の宿泊は激減した．そうした影響を受け，スポーツ合宿に2005年ごろから取り組んでいる．当初は，鹿島神宮と縁深い武道関連合宿を受け入れたが，現在ではサッカー合宿が中心である．2013年よりグラウンド所有を開始し，現在２面目の開発も計画中である．グラウンドが１面のため，個別合宿の場合は１チームしか受け入れらないが，サッカーフェスティバル等の大会開催期間は複数チームを受け入れ，2018年には計30チームの合宿の利用があった．従来の形態の宿泊業を続けることは困難であり，スポーツ合宿のメリットであるリピート率が高く，連泊が期待できることを重要視し，今後もグラウンド開発を積極的に行う意向を持つ．

写真２　鹿Aにおけるサッカー合宿の様子
（2019年５月　吉沢撮影）

２）スポーツ合宿関連組織の取り組み

鹿島エリアおよび鹿行南部のスポーツ合宿には，Jリーグに属するプロサッカーチームである鹿島アントラーズの存在が関係している．鹿島アントラーズは，Ｊ１に属するトップチームの他にもアカデミーを設置し，その中に各育成年代のアンダーカテゴリーのチームがあり，サッカー教育に力を入れる[10]．その背景から多くの大会に開催に関与し，中でも2007年から鹿行南部で主催するNikeカップは規模が大きい．同大会は夏季に開催され，U9（９歳以下），U10，U11，U12，U14，U15の６つのカテゴリーで大会が行われる．2011年からは全国各地で地区予選が行われ，最終ラウンドが鹿行南部で行われる．現在では，Ｕ９からU12の小学生カテゴリーは各カテゴリーが平均約30団体，U14およびU15の中学生カテゴリーは各カテゴリーが平均10団体弱，１団体に平均20人が参加する．しかし，大会期間中の宿泊施設やグラウンドは，主に波崎エリアの大規模施設を利用する．大会関係者への聞き取りによると，大規模な大会となるために，宿泊施設およびグラウンドの規模や質という面で，波崎エリアが最も適しているからだという．現状，鹿島エリアでは，大会の規模に適した宿泊施設が少なく実施は難しい状況だという．

また，2018年からはアントラーズホームタウン

第４表　インバウンド合宿の実績（2018年度）

国名	チーム種類	泊数	人数	総宿泊数	宿泊先
タジキスタン	U16代表	7泊	30名	210泊	鹿島エリア 企業研修所
スリランカ	A代表	13泊	31名	403泊	神栖エリア ホテル
中国	クラブチーム（9歳～16歳）	10泊	24名	240泊	潮来市 ホテル
東ティモール	A代表	11泊	27名	297泊	潮来市 ホテル
キルギス	A代表	7泊	38名	266泊	鹿島エリア 企業研修所
中国	クラブチーム（10歳～11歳）	2泊	59名	118泊	鹿島エリア 企業研修所
香港	大学生バスケ部	2泊	20名	40泊	行方市 旅館
ベトナム	大学生サッカー部	1泊	22名	22泊	鹿島エリア 企業研修所

（アントラーズホームタウンDMO提供資料より作成）

DMOを設置し，主要事業として主にインバウンドのスポーツ合宿の誘致とコーディネートを積極的に行う[11]．2018年度は８件のインバウンドスポーツ合宿をコーディネートし，合計1500泊以上もの宿泊数を記録した（表４）．インバウンド合宿の参加者には，各国のアンダーカテゴリーを含む代表チームなどが訪れている．こうした背景には，鹿島アントラーズや日本サッカーの優位性が影響しているという．2018年には鹿島アントラーズはアジアチャンピオンズリーグで優勝し，アジアNo.1チームとなった．また，2018年10月現在日本サッカーの世界ランキングはアジア第１位であり，そのブランド力を利用しアジア諸国を積極的に招致したいという．実際に，インバウンド合宿に訪れたチームには鹿島アントラーズのコーチが派遣され，指導や練習メニュー提案などがサービスの一つとして行われる（写真３）．インバウンドスポーツ合宿の宿泊では，鹿島工業団地内にある企業研修所とビジネスホテルの利用が多い．この背景には，国内学生団体へのスポーツ合宿と，インバウンドスポーツ合宿の受け入れでは異なる対応が必要になる点にある．外国人に対応するには，言語・文化対応やインターネット環境などが必要になる．そうした設備やノウハウは，現在のところ鹿行南部のスポーツ合宿に取り組む宿泊施設には備わっていないという．

写真３　インバウンドサッカー合宿の様子
（2018年10月　武が撮影）

Ⅳ　３エリアのスポーツ合宿関連施設の差異

ここから，鹿行南部の宿泊施設とスポーツ施設の性格をエリア間で比較し，鹿行南部のスポーツ合宿地の特性を把握したい．

まず，鹿行南部の宿泊施設は表５のように示される．３つのエリアにおいて，スポーツ合宿に取り組む宿泊施設の割合は，波崎エリア（100％），神栖エリア（67％），鹿島エリア（33％）と異なり，３エリアにおいてスポーツ合宿の重要性は異なると言えよう．宿泊施設の規模においては，波崎エリアで大規模施設が多い．これは波崎エリア

第５表　３エリアの宿泊施設の特性（2019年）

	波崎	神栖	鹿島
宿泊施設数 （スポーツ合宿に取り組む施設数）	19（19）	34(24)	15(5)
全宿泊施設の規模割合 <小/中/大規模>	0%/63%/37%	22%/72%/6%	40%/47%/13%
エリア内の総収容人数	4010	2746	1461
エリア内の総部屋数	644	1458	541
1部屋あたりの収容人数	6.2	1.7	2.7

（各エリアの旅館業組合提供資料により作成）

の顧客のほとんどがスポーツ合宿客であり，宿泊施設が団体客に特化しているためである．また，１部屋あたりの収容人数も波崎エリアが多く，宿泊施設の大部屋で団体生活をする滞在形態となっている．一方，神栖エリアでは，中規模な宿泊施設が卓越し，一部屋あたりの収容人数が1.7人と少ない．これは，神栖エリアの宿泊施設の定期修理時の工員の受け入れを中心に設計されるためである．宿泊施設への聞き取りによると，工員達が長期滞在する際にプライベートが確保できる空間を求めるため，小規模な部屋の割合が高いという．鹿島エリアは，小・中規模の宿泊施設が多く，大規模施設は少なく，神栖エリアと波崎エリアの中間に位置づく特性を有する．

次に，鹿行南部のスポーツ施設の特徴を把握する．スポーツ施設の分析に際し，３地域のすべての①スポーツ施設の主要用途，②スポーツ施設が公共か民間所有のどちらなのかを把握し，表６に整理した．まず，鹿行南部の顕著な特徴としてサッカー場の数が多く，その大部分は波崎エリアの民間所有施設が占める．野球場は17面であるが，これに加えて，波崎の民間所有のサッカー場の中には，野球場として利用可能なものが14面ある．テニスコートはその多くが公共施設として運営される．鹿島エリアに民間のテニスコートが25面存在するが，すべて宿泊施設鹿Aに併設され，鹿行南部でテニスコートを有する唯一の宿泊施設である．スポーツ施設を公共・民間別にみると，神栖

第６表　３エリアのスポーツ施設の一覧（2019年）

スポーツ施設（面）	公共			民間			全体
	波崎	神栖	鹿島	波崎	神栖	鹿島	
サッカー・ラグビー等	6	8	5	78	0	12	109
野球・ソフトボール等	5	8	3	2	0	1	19
テニス	2	30	11	0	0	25	68
フットサル	1	3	0	16	0	9	29
陸上競技	1	1	0	0	0	0	2
バスケット/バレーボール等	4	2	6	1	0	1	14
剣道・柔道等	4	6	4	0	0	0	14
プール	0	1	1	0	0	0	2
ダンス	1	0	0	12	0	0	13

（現地調査より作成）

エリアの公共スポーツ施設と波崎エリアの民間スポーツ施設が同分類の他エリアと比較して多く，民間所有のスポーツ施設が充実する波崎エリア，多くの公共スポーツ施設を保有する神栖エリアという対照的な性格が認められた．鹿島エリアには，民間スポーツ施設も存在するが，その所有は一部の宿泊施設に限定される．

Ⅴ　鹿行南部におけるスポーツ合宿の特性と地域間連携

Ⅴ－１　スポーツ合宿の特性

これまでの結果を踏まえ，まず３つのエリアで行われるスポーツ合宿の特性について整理する．

波崎エリアでは，1990年頃から民間の宿泊施設によるサッカーグラウンド開発が積極的に行われ，その面数は現在78面に達する．この背景には，農業の担い手不足等により農地転用が比較的容易だった点があげられる．スポーツ合宿地として発展するにあたり，民間エージェントが重要な役割を担い，現在でも大会実施および安定した送客が行われる．また，バス送迎，昼食手配等のスポーツ合宿に関わるサービスの全てが宿泊施設により提供され，宿泊施設を主体としたスポーツ合宿の受け入れがなされる．現在，波崎エリアの宿泊施設の利用者のほとんどがスポーツ合宿客であり，波崎エリアはスポーツ合宿に大きく依存している．

神栖エリアでは，鹿島開発に伴い1970年ごろから定期修理のための工員を主な利用者として想定した宿泊施設が設置された．現在も春季の定期修理の時期が繁忙期である．その中で，スポーツ合宿は，その他の閑散期に顧客不足を補うために取り組まれる．また，定期修理の繁忙期とスポーツ合宿のハイシーズン前のグラウンド整備時期が重なるため，グラウンド等の管理が難しく民間所有のスポーツ施設はない．神栖エリアのスポーツ合宿は，公共スポーツ施設を利用し行なわれる．また，神栖エリアは波崎エリアと近接しているため，波崎エリアでの大会時にエージェントを通して送客を受ける宿泊施設もある．また，近年は行政との協力関係が構築され，民間と行政が共同したスポーツ合宿が推進される．

鹿島エリアは鹿島開発の時期より比較的サッカーが盛んな地域であり，ホームスタジアムやクラブハウスの立地など，鹿島アントラーズのホームタウンとしての中心性を有する．しかし，スポーツ合宿に取り組む宿泊施設は３割程度と少数である．そのうち大規模投資が行われた宿泊施設である鹿Aの存在が大きい．その他の施設では，2000年以降にグラウンドが設置され，波崎エリアに比べて後発的にスポーツ合宿に取り組む．鹿島アントラーズはユース世代の育成に取り組む中でサッカー大会を実施し，スポーツ合宿客の獲得に繋がっている．また近年は，鹿島アントラーズDMOによるインバウンド合宿が推進される．これは日本のスポーツ合宿においても新規性が高い取り組みであり注目されよう．

このように鹿行南部の特徴として３つのエリアが異なる形でスポーツ合宿を受け入れる状況が明らかになった．また，その差異は３エリアそれぞれの農業や工業など周辺産業と関わる要因により生じていると考えられる．

その一方で，共通する取り組みも認められる．それはスポーツ大会，主にサッカー大会の実施である．スポーツ大会を実施することによって，個人チームの合宿であれば１つのグラウンドに１チームである利用者数を複数に増やすことができ，効率的な集客が実現できる．また，大会参加がその後の個人チーム合宿につながるというメリットもある．また，その大会が通年化し参加チームのレベルが高くなると，スポーツ合宿地としてイメージ構築にも役立っていた．鹿行南部エリアでのスポーツ大会の実施においては，エージェントの役割が大きい．波崎エリアでは，1993年以降のスポーツ合宿に関する開発が進む過程においてもエージェントの助言が重要視された経緯があり，鹿行南部において重要な役割を担っている．押見ほか（2011）は，エージェントが学生スポーツチームの合宿地選定において重要な役割を担う

ことを指摘した．くわえて，波崎エリアでは大会実施と送客を中心とした関わりにより，スポーツ合宿地の形成においても重要な役割を担うことが示唆された．その他大会実施においては，鹿島アントラーズや行政によって実施される大会もあり，多くの主体による大会が鹿行南部で行われる．

Ⅴ－２　スポーツ合宿地における地域間連携

ここから本研究の関心として提示したスポーツ合宿地間の地域間連携について議論したい．

鹿行南部ではスポーツ合宿を行う上での地域間連携が確認できた．まずは，波崎エリアでの大会時の神栖エリアへの送客である．長期休暇中のサッカー大会時には，波崎エリアの収容人数を超える集客があり，その際，エージェントによって神栖エリアの宿に送客される．神栖エリアの宿泊施設の中には，その送客をきっかけにスポーツ合宿の受け入れを始めるものあった．また，鹿島アントラーズ関連大会であるナイキカップは，波崎エリアで行われる．さらに，日本版の地域連携DMO候補法人であるアントラーズDMOの設置も地域連携の取り組みの１つである．アントラーズDMOは，これまで鹿行南部で実施されてきた学生中心のスポーツ合宿との競合を避けるためにインバウンドを推進している．しかし，その取り組みは言語文化対応の面から，限定された宿泊施設に留まり，現状では地域全体に効果を波及することは困難である．

スポーツ合宿に関し，これらの地域間連携が確認されたが，その地域連携の重要性は鹿行南部のスポーツ合宿の規模からすれば大きいものとは言いがたい．現状，鹿行南部のスポーツ合宿においてはⅢで示した各３エリア内でスポーツ合宿の受け入れが主となっている．これには，スポーツ合宿のツーリズム形態が関係していると思われる．

まず，ツーリズムの目的はスポーツ活動であり，その活動内容および活動環境が重要視され，観光対象の新規性は必要とされない．片山・牧島（2016）は，観光地一般にとっては一定の繁栄を維持していくためにツーリストの行動範囲内に複数の観光資源を必要とし，その際に観光地間の地域連携が有用な手段となると指摘した．しかし，スポーツ合宿の受け入れにおいては，ツーリストの行動範囲が宿泊施設とグラウンドに限定されるため，スポーツ大会の実施など，各エリア内での連携は生じても鹿行南部エリア全体での連携には至らないと考えられる．また，スポーツチームにとって，スポーツ合宿は毎年同時期に同じ場所で行う恒例行事と認識され，活動内容の変更も少ないと思われる．さらに，毎年同様のスポーツ合宿を行うことで，運営負担の軽減につながるメリットもある．このような背景から鹿行南部内で地域間連携により新たな活動を提案する必要性は乏しい．

次に，スポーツ合宿を行う顧客に着目してみる．まず波崎エリアでは，1990年以降のスポーツ合宿への取り組み以降にリピーターの獲得に成功し，現在はほとんどが固定客となっている．一方で，神栖エリアではこうした波崎エリアの発展も受け，波崎エリアが新規顧客をこれ以上受け入れられない状況も踏まえ，行政のスポーツツーリズム推進室を介した新たなチームの誘客を重要視している．また，鹿行地域全体としてスポーツ合宿の推進を行うアントラーズDMOにおいては，鹿島アントラーズのブランドを利用し，顧客圏を海外に広げ誘客している．この動きは鹿行南部のスポーツ合宿への取り組みが広がる中で，各組織が顧客を学生固定客，学生新規客，海外チームと棲み分けながら，全体として顧客圏を広げている動きとして解釈できる．

Ⅵ　おわりに

本研究の目的は，茨城県鹿行南部のスポーツ合宿地である波崎エリア，神栖エリア，鹿島エリアのスポーツ合宿の特性を分析し，その上でスポーツ合宿地における地域間連携について検討することあった．その結果，以下のことが明らかになった．

まず，波崎エリアでは1990年頃から民間の宿泊施設による積極的な民間スポーツ施設の設置が行

われ，地域内に多数のサッカーグラウンドが形成され，その際に農地の積極的な転用が行なわれた．また，エージェントによる大会実施と送客が重要であり，現在の顧客はほとんどがリピーターとなっている．神栖エリアでは，1970年頃の鹿島開発により，春季の定期修理の工員を主要な客層とした宿泊施設が設置された．その他の閑散期を補うためにスポーツ合宿の受け入れがなされる．スポーツ合宿の際には，公共スポーツ施設が用いられ，スポーツ施設の宿泊施設による民間所有は，通年を通した管理が困難であるため行なわれない．また，スポーツ合宿の推進に際し，スポーツツーリズム推進室が設置され，行政の協力関係が構築される．鹿島エリアでは，少数の宿泊施設でスポーツ合宿の受け入れがなされ，大規模投資が行なわれた宿泊施設の存在が大きい．また，近年はアントラーズDMOによるインバウンド合宿が行なわれ，新たなスポーツ合宿形態が認められる．このように近接した３つのスポーツ合宿地において，地域の他産業との関わりの中で，それぞれ異なるスポーツ合宿が行なわれる状況が明らかになった．

そうした中，３エリア内での地域連携は，波崎エリアの大会時の神栖エリアへの送客，鹿島アントラーズ関連の大会の波崎エリアでの実施，地域連携DMOであるアントラーズDMOの設置が確認できたが，その重要性は高くない．このように，スポーツ合宿において地域間連携が行なわれない理由としては，スポーツ合宿においては，観光対象の新規性が求められず地域間連携による新たな展開の必要性に乏しいこと，スポーツ合宿における行動範囲が主に宿泊施設とスポーツ施設に限定されエリアを越えた地域間連携の必要性がない点が指摘できた．

本研究の実施にあたっては，神栖市産業経済部観光振興課スポーツツーリズム推進室，鹿嶋市政策企画部政策秘書課，鹿嶋市教育委員会スポーツ推進課，波崎旅館業協同組合，神栖旅館業組合，一般社団法人アントラーズホームタウンDMO，株式会社鹿島アントラーズFC，そして鹿行南部の宿泊施設の方々に多大なるご協力を頂きました．記してお礼申し上げます．

［注］

1）国土交通省観光庁ホームページ『観光圏の整備について』https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/seibi.html（最終閲覧日2019年11月30日）

2）国土交通省観光庁ホームページ『日本版DMO』http://www.mlit.go.jp/kankocho/page04_000053.html（最終閲覧日2019年11月30日）日本版ＤＭＯは，地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに地域への誇りと愛着を醸成する「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役として，多様な関係者と協同しながら，明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定するとともに，戦略を着実に実施するための調整機能を備えた法人である．

3）国土交通省観光庁ホームページ『日本版DMO・日本版DMO候補法人登録一覧』http://www.mlit.go.jp/kankocho/page04_000054.html（最終閲覧日2019年11月30日）

4）現在の鹿嶋市は，1955年に旧鹿島町が大野村を編入してできた地域である．また，現在の神栖市は，2005年に旧神栖町と旧波崎町の合併が行われたことにより形成された．

5）2018年地方財政状況調査による．

6）特に，４年に１度実施される大規模な定期修理は大規模であり，例年より多くの宿泊需要を生む．

7）鹿嶋市ホームページ『第三次鹿嶋市総合計画後期基本計画』http://city.kashima.ibaraki.jp/03intro/0305.htm

8）サッカーのみならず柔道や剣道，野球やテニス等も推進しており，1997年に屋内スポーツ施設である鹿嶋スポーツセンターが卜伝の郷運動公園内に設置された．

9）神栖市旅館業組合の提供資料による．

10）鹿島アントラーズオフィシャルサイト『アカデミー』https://www.so-net.ne.jp/antlers/academy/

index.html（最終閲覧日2019年11月30日）アントラーズ育成組織は，地域に根ざしたJリーグ育成組織を目指し，鹿島市，日立市・つくば市の３拠点を中心に活動する．地域密着型の選手育成システムの確立のために，現在，県内16校・千葉県銚子の計17校でスクールを展開する．

11）アントラーズDMOの現地提供資料による．DMOの観光事業はスポーツツーリズム，アグリツーリズム，エコツーリズム，ヘルスツーリズムの４つあり，中でも鹿行地域の観光産業の中心となるスポーツツーリズムを重要視している．

［文　献］

井口 梓・小島大輔・中村裕子・星 政臣・金 玉実・渡邉敬逸・田林 明・トム=ワルデチュク（2006）：九十九里浜における観光の地域的特性-白子町中里地区のテニス民宿を事例に-．地域研究年報，**28**，127-166.

石井英也（1970）：わが国における民宿地域形成についての予察的考察．地理学評論，**43**，607-622.

押見大地・原田宗彦・佐藤晋太郎・石井十郎（2012）：スポーツチームの合宿地選考における意思決プロセスの検討：高校・大学スポーツチームに着目して．スポーツ産業学研究，**22**，9-27.

鹿嶋市文化スポーツ振興事業団編（2011）：『図説鹿嶋の歴史　近代・現代編』鹿嶋市教育委員会.

片山健介・牧島理香（2016）：広域連携による観光地域づくりの意義と課題に関する一考察－佐世保・小値賀観光圏を事例として－．日本都市計画学会都市計画報告集，**14**，317-321.

神栖町史編さん委員会編（1989）：『神栖町史 下巻』神栖町.

新藤多恵子・内川 啓・山田 亨・呉羽正昭（2003）：菅平高原における観光形態と土地利用の変容．地域調査報告，**25**，19-45.

須山 聡（2010）：奄美大島におけるスポーツ合宿定着の地域的条件－新たなツーリズムの模索－．平岡昭利編『離島研究IV』海青社，110-124.

波崎町誌刊行専門委員（1990）：『波崎町誌』波崎町.

原田宗彦（2003）:スポーツツーリズムと都市経営．原田宗彦編『スポーツ産業論入門第３版』，杏林書院，263-273.

柳沢和雄(2007)：鹿島開発とワールドカップサッカー －外発的発展としてのW杯．松村和則編『メガ･スポーツイベントの社会学－白いスタジアムのある風景』，57-88.